

エーゲ文明研究の近況について

——やや問題的に——

村 田 数 之 亮

一

このような潜越な課題を私はむしろわびしさと責務とから取りあげたにすぎない。その理由は戦時戦後の十余年間にわたる困窮と混乱とのなかにあつて海外の学者たちは決して空白と退化の時期としていなかつたことがわかり、今後も彼等の活動と成果とはますます増大することを確約しているのに反して、我國の現状では彼等の跡を追ふことさえ次第に困難を増大してゆくという見込しかないからである。次には外国に関する学問にたずさわる者にとつては、まず海外における研究の現段階を学び知ることが、再出発にあたつての責務であると私は感じるからである。もとより私が見ることができた書物は偶然的の一面的で不十分であるばかりでなく、誦したものは僅少であり、雑誌はより少ししかふれえないから、この論稿は新

エーゲ文明研究の近況について (村田)

刊紹介的となることをお断わりしておきたい。

戦時と戦後の十数年間は勝者敗者の国をとわず学者は時には絶望的な庄迫と障害とをうけたにちがいないが、それらに打勝つて彼等は驚くべき業績をあげていたのである。しかしこの苦難の時期において学者達は決して自己の欲する通りの道に進みえたわけではなかつた。彼等は与えられた条件の下において自己の最善をつくし不断の努力をつづけたのである。その制約とはまず第一に国外における——ギリシアなど自国に活動地域をもつ国では別として——発掘をほとんど不可能にしたことであつた。かくてエーゲ文明の研究は反省と整理の面に進むほかなく、そのために次のような成果がえられた。(一)エーゲ文明はその内にいくつかの諸文明を包み、これまではその個別的な研究に重心があつたが、いまやそれらの間に有機的合理的な関連と結合を求めて、統一体としてのエーゲ世界を把握し

ようとした。やもすれば並列的なし分散的であつたエーゲ文明世界が、その始めから終末まで一つ綜体にとめられる。(二)編年の進歩。エーゲ文明内の諸文明のあいだの相互ばかりでなく、古代東方の編年——この進歩は注目される——と直結して、エーゲ世界の諸文明の各時期の絶対年代が精密に正確になろうとした。(三)エーゲ文明とその近接する文明との相互関係が——時間的に空間的に——強く求められた。

以上の諸傾向はもとよりあい関連するものであり、時には同一面の異なる表現でしかない場合もあるが、ともあれ、エーゲ文明は他の古代文明に対してその独自性と相関によつて、独立の、有力な文明としての成人した姿をより明かにしてきたといえよう。小論稿は大体以上の面から述べようと思う。

一九三八・九年ごろまでのエーゲ文明研究の発展については拙稿「エーゲ文明研究の発展史」(「エーゲ文明の研究」所収)。

二

エーゲ文明というエーゲ海周辺の先史文明にはクレタ、キクラデス、ヘラディック、テッサリア、ミケネ、トロイアの諸文明がふくまれていて、それらは相互に接触し交渉しながら、それ自身の発

展段階をもつて変遷している。戦前までは發掘の誘惑もあつて、全体としてのエーゲ文明の記述には諸文明の関連に留意されていたとしても、とかく並置的であることをまぬがれなかつた。したがつてクレタ文明から次にミケネ文明へと叙述の主軸がうつつてゆくのであつて、その他の文明のエーゲ世界の変遷に対する意義は充分に認められていなかったと思われる。

ここに A. Matz, Die Ägäis (in Hdb. d. Archäologie, 4te Lief. 1950, S. 179-308) が著された。この書はエーゲ世界の全地域、全文明をばその最初からして結合し歩調をあわせた一つの姿において理解しようとする強い意図のもとに書かれたものであり、たしかにこの点において在来書よりも一歩、あるいは数歩進めた労作と思われる。もとよりこの書は Hdb. d. Altertumswissenschaft の一部であり、この叢書の目的からして、マツツの執筆分もあらゆる事実を網羅し、詳細きわまる文献をあげていて、通読するには気のきかぬものかもしれないが、また読み返せばその度毎に得るところのある甚だ凝縮した書物である。それで甚だ紹介しにくいものであるが、私は上にのべたような観点から——他の面からの紹介の仕方もあるが——この書を見て、それとともに戦時と戦後の著書をかえりみながら、エーゲ文明研究の方向と業績とにふれようとおもう。

そのために本書の目次はマッソの意図をよく示しているから、それをかかて置く。

A. Neolithikum I. Thessalien und Makedonien II. Mittelgriechenland, Peloponnesos, Westen III. Kreta. B. Kupfer-Bronzezeit I. Frühhelladisch (FH) II. Kykladen III. Osten (Troia) IV. Frühminoische (FM) C. Früh- und Mittlere Bronzezeit I. MM I-II II. Blütezeit der minoischen Kultur (MM III-SM I) III. MH. IV. Frühmykenische (SH I) D. Jüngere Bronzezeit I. Jüngere Spätmykenisch (SM II) II. Letzte Spätminoische (SM III) III. Mittel und Spätmykenische (SH II-III) (F. M. S. はそれぞれ初期・中期・後期であり、M は Minoisch, H は Helladisch.)

ここにエーゲ文明世界はいずれの段階を通じてみても、その内にある諸文明が相関して変化発展していることが、示されようとしているのである。以上の章や節の分け方と組立て方からしても、マッソがエーゲ文明世界の有機的な把握に努めていることがわかるが、もう少し具体的にこの面において従来の書とは異なる諸点を——相対的な所もあるが——あげれば、次の如くであるといつてよい。(一) 新石器文明ではテッサリアが中心であるが、その他にペロポネッス、クレタなどの新石器文明がそれに結合されて、新石器時代のエーゲ

世界が統一の姿として示された (本書 A)。 (二) 新石器文明から金属期文明への推移とその時代においてはギリシア本土の初期ヘラディックが重視されて、クレタはまだエーゲ世界の指導者ではない (B)。 (三) トロイアはエーゲ文明世界においてまだその正当な地位において評価されてないけれども、初期金属時代 (銅・青銅器時代) の一つの重心として組み入れられている (B)。 ついで青銅器時代はクレタ文明時代であるが、マッソはこの文明と当時のギリシア本土の文明との相関関係を重視するから、この時代においてクレタ文明に次いでミタネ文明が現われるのではなく、両者は——MH. SH. と MM. SM.——交錯して、エーゲ文明世界の発展が説かれる。すなわち従来の書とは異つて、(四) 初期ミタネ時代 (SH I) が、クレタの MM III や SM I と並存して取扱われ (C)、(五) そのためにクレタでは SM I と SM III との間の差異が強調されて時期を割した (C・D)。このためにクレタ没落をもつてエーゲ文明の時期を割する事件とせず、したがつてこの年である前一四〇〇年ではなく一五〇〇年が大きな区分期となつている。以上のようなエーゲ文明の新編成は、ただ機械的に青銅器時代をば初期、中期、後期と区分することから来たばかりでなく、むしろ常に全エーゲ世界の状況をば重視する結果である。あるいはクレタを主体とする従来の編成に対し

て、ギリシア本土の意義と主体性を重視したからでもある。またオリエントなどの他の世界との相関関係に考慮したところからもきている。

ともかくここにエーゲ文明世界はその当初から終末まで常に一つの統合体としてとらえられて、強く緊密な一つの体系になったといえる。このことはマツツの広い視野と対象に対する考古学的な鋭い眼識とさらに強力な把握力とをまつて、はじめて達成されたものといえよう。そして今後において恐らくエーゲ文明世界を説く者は、少くとも根本においてはこの体系、編成に従うのほかにないであろうと私は思う。しかしながらマツツがこのような緊密な構成をなしたのには、彼がいささか強引な結論や推論を敢行したため、より正しく言えば、彼はエーゲ文明の現在の重要な諸問題について一応の判定を下し裁決したから可能であつたのである。それだから、私はマツツの編成を是認するが、なお議論のあるところをのべることは、当然エーゲ文明研究の諸問題とそれの現段階を指し示すことになると思われる。こういう観点からさきにあげた本書が特色とする諸項について順次により詳かに検討することになるのである。

まづ新石器時代においてマツツは二つの大きな問題に対決しなければならなかつた。それは最初の新石器文化であるセスクロ文化

(すなわち Thesalia I; Neolithikum A) の系統と荷担者を決定し、インドゲルマン人のギリシア出現を何時に認めるかということである。

マツツによるとセスクロ文化は小アジアからシリアを含む地中海周辺を蔽うていた地中海人種 (die mediterrane Rasse) の所産である^①。この説は先史ギリシア研究がその最初に当面する大問題であつて、セスクロ文化系の土器や住宅址その他の出土品が相当地に各地において発見されているにかかわらず、未解決である。このマツツの説は大体において戦争前夜ころから説かれて、ドイツ学者に強く認められるようであつた。^② F. Schachermeyr, Zur Indogermanisierung Griechenlands, (Klio, XXXI, 1939, 235 f. bes. 236 f.) は戦前までに到達されたこの説の代表的な注目されるべき論文である。この論文によると、前ギリシア的な地名をもつエーゲ的要素は vordaritschisch である^③、dinarisch である^④、むしろ westliches Rus enstanz である (ibid. 239) と。この die westliche Rasse なるものは、私にはいささか未確実な実態のように思われるが、^⑤ともかくこの説はギリシア本土などの最初の住民をば従来の北方系またアジア系とは別な系統とした点において新奇であつた。しかしいまマツツはこの地中海人種をばより具体的に認定しているのである。すなわち考古学

的に主として土器において渦文が欠如していること——次いで並び
られる北方系のデイミニ文化に対して——座彩でなく多彩であるこ
と、形態感の相異などから西方的な地中海人種が断定されたのである。
従来はセスクロ文化のメガロン——むしろ Urmegaron である
が——が、その北方系の一証掇とされていたが、マツはセスク
ロ文化にはメガロンを認めず、次のデイミニ文化からそれと認め、
しかもメガロンを特定人種の産物とすることに反対して、自成する
ものとしている。

しかしこのようなセスクロ人の規定はまだ断定し難いのが実情
であらう。Wace, Blegen らの英国派は慎重である。彼等によると
(Klio. XXXI. 1939. 140 f.)、^⑨ ユーゲ世界の最古の住民は unknown
quality であるのである。ともかく現在においてはセスクロ人をこ
の「未知」なものとしないう人々においては、少くとも北方系でない
ことは大体認められてよいと思う。

しかし北方系でないことから踏みだすと、地中海系よりはアジア
系とする説が強い。新しくは Ch. Deloye (Les seconde civilisa
tion neolithique du continent grec. Bull. Cor. Hell. I, XXII 1949. Des.
116 f.) によると、ギリシアの新石器時代一期(セスクロ)は Balc
ano-danubien よりむしろ Proche-Orient asiatique であり、また Child

ユーゲ文明研究の近況について(村田)

(Dawn of the European Civilisation. 5 ed. 1950. p. 61.) はアジア
的としている。そこでセスクロ文化の荷担者はアジア系であらうか、
それとも地中海人種であらうか。このことは将来の発掘と研究にま
つはかはなく、両説ともに材料が不足であるといえる。^⑩

この問題と関連してこれまで人種の北方系を示す一証として認め
られていたメガロン——すなわちメガロンの北方起源説——の評価
が変つたことにふれておきたい。すでに Smith-Dinsmore (AJA. 46.
1942) はメガロンの起源としてヨーロッパ・ロシアあるいはその近
接地をと考えたが、この説を進めて V. Müller, Development of
the "Megaron" in Prehistoric Greece (AJA. 48, 1944. 342 f.) は
E・M・M・H・L・H・を通じて三二個のメガロン型をとりあげ比較し
て、ギリシアにおける次のようなメガロンの発展を証明した。EH
のものは初期の発展段階にあり、MH には外部の影響によつて「混
合形 amalgamated Type」——多くの部屋、廊下、曲線の後壁など
をもつ——があらわれ、LH にはその反動として、また主権の強化
や文明の進歩とともに再び孤立家屋の型になる。多くの学者達が、
ギリシア人が侵入してきた時期とする、MH に混合形が盛んである。
それでこの混合形を他民族のもの、孤立形をギリシア人のものとす
るのは大きな誤りである。ギリシア人はこの孤立形を民族的な型と

したのであつて、その發展には他民族の参与があると、ミュラーは説いた。かようにしてメガロンは人種の北方系を示すものではないのである。マツツもトロイアのメガロンをもつて東地中海—西小アジア的な所産としている（213）。

つぎにインドゲルマン人がギリシアにあらわれた時期はいつであらうか。セスクロ文化に続くディミニ文化（Thessalia B, Neolithicum B）の所産者がドナウ・ジーベンビュルゲン方面からきたことについては、今日では議論の余地はない。その土器は黒色の鈍釉で渦文やマイアンデル文をもち、構成的な形をしているし、はつきりとメガロンが現われていることなどが——完成したのはギリシア人として——その動かしえない証拠を提供している。しかし、それならばインドゲルマン人も北方から来たのであるから、彼等とディミニ文化との関係はどうなるか。従来から広く承認され、今日も最も妥当なのは、MH（中期ヘラディック）のミニアス土器の負担者をもつて最初のインドゲルマン人とする説であるが（Wace-Blegen, *ibid.*, 140; Child, *Dawn*, 13）マツツはより早くEH（初期ヘラディック）においてそれを認めようとするのである（203f.）。一体、EHはギリシア本土の初期金屬時代であるが、彼によると、それはテッサリア第一期と北方系とが混合し、それに東方からの刺戟が加わつ

て生れたものであつた。そしてこのEHの *Urform* には東方の影響が認められるが——このためにチャイルドはEHをアジア的とみる——この時代には第二の弱い成分として、別種の土器が現われている。それは形と文様とにおいて分割的で垂直的な対立を示すものであつて、北欧の *tektonisch* と相通する *Bandkeramik* であり、この *Bandkeramik*こそ最初のアーリア人であると主張する（203f.）。一体ドイツの学者には、その中欧の考古学研究からして東南欧への関連を求める傾向が強いようであつたが、近頃のドイツにおいてはEHにインドゲルマン人を認める説が有力になつてきているように思われるのである。しかしEHに早くもアーリア人を認めるとすれば、それ以前の、そして判然と北方（ドナウ方面）から中欧から来ている新石器時代のディミニ人もインドゲルマン人としての發言權をもつてもよいであらう。E. Meyer, *Indogermannentage* 1948^④はディミニ人において最初のインドゲルマン人を主張するのである。マイヤーにまでくれば論理的な推理は満足するであらうが、私はまだ充分な論証に接していないので——マツツは不充分——将来にこの問題は残すべきだと思ふ。

そしてなおマツツがEHの成立のためには東方の刺戟があつたといふことにしても、まだ問題は残されている。さきのチャイルドや

デルフワイエが説いているにかかわらず、小アジアの研究者はなおこの点について充分な確証をもっていない。K. Bittel, *Gründzüge der Vor- und Frühgeschichte Kleinasiens*, (2. Aufl. 1951, S. 37.) によれば、次のように述べている。前から認められていた西端小アジアとエジプト初期キタラミスとの間の一致 Übereinstimmungen を正しい観察に基づくものであるが、後二者が前者に直接依存するこの考えは保持されない。三者は甚だ分離した状態にあるから、ただ Verwandtschaft が、精々まだ未知な関係が予定されるだけだとして、彼も解答を将来に残しているのである。

いずれにしてもエーゲ文明の初期の重要な諸問題はエーゲ世界だけでは到底解決しえないことを示している。のみならず、トロイア文明はエーゲ文明に属しながら、その背後の小アジアとの関係が明らかにならなければ、自身の問題さえ僅かしかとけない状態である。

- ① R. Dussaud, *Les Civilisation préhellénique dans le bassin de la mer égée*, 1914. 以下 H. R. Hall, *Civilization of Greece in the Bronze Age*, 1928. は、全エーゲ世界の発展に留意した点で注目される。本書については註③参照。
- ② ユールブルク大学教授でドイツ古典考古学界の大家の一人と云い、Geschichte der gr. Kunst Bd. I. 以下 Die Geometrische und die Früharchaische Form, 2 Bde, 1950. 著

エーゲ文明研究の近況について (村田)

書いた。

- ③ ハールの前書とその目次だけでも比較すると興味がある。その目次は I. Introduction (新石器時代をふくむ) II Early Bronze Age (以下 BA と略す) (EM II) III From Early to the Middle BA (EM III-MM II) IV From Middle to the Late BA (MM III-LM I) V Late BA (continued, LM I-II) VI Transition Age of Iron (LM III) フェンメル形上や相通しているが、内容におうづらは可成り異り、ほとんど緊密に組立てられている。

- ④ フェンはその *Frühkretische Siegel* 1928. においてこの説を唱えているが、此書を私は見ていない。なお彼以外にも同様な説は可成り説かれている。後文参照。

- ⑤ より早くは S. Fuchs, *Die gr. Fundgruppen der frühen Bronzezeit und ihre auswärtige Beziehung*, 1937. による由 (Schlachtermeyr. の上掲論文より利用) Klio. XXXI. 256 ff.)。

- ⑥ シヤック・ナブールは *La Race et la Kultur im minoischen Kreta*, 1939. によるものである。拙著「エーゲ文明の研究」二〇〇頁参照。

- ⑦ 前註参照。

- ⑧ 拙稿メガロン考(「エーゲ文明の研究」所収、二七一頁以下)あるいは Wace-Thomson, *Prehistoric Thessaly*, 65, 105 f. 以下多々ある。

- ⑨ フェンメルが彼等のこの論文 Pottery as Evidence for Trade

and Colonisation in the Aegean Bronze Age. をもつて英國派の代表として (Klio. XXII. 140 f.)

- ⑩ C. Schuchardt, *Aleuropa* (5. Aufl. 1944. 160 f.) はメッセ人を北方系としてするが、H. Berve, *Griechische Geschichte* の戦前版 (一九三三) では彼等を北方系としていたのに、戦後の再版 (一九五一) では地中海人種にあらためてゐる。

- ⑪ くわしくは Matz, *ibid.* 188 f. に諸説をあげてゐる。
⑫ 本書は私は見てゐない。

三

初期金属器時代ともいふべき銅器青銅器時代になつてトロイアはエーゲ文明の東部文明として初期ヘラディック、キクラデス、初期ミノア文明と肩をならべて登場してくる。とかく孤立するトロイア文明をより大きな文化圏と関連させて把えるためには、小アジア研究の成果をとり入れるの他はない。マッツもそうであつて、A. Güz, *Kleinasiens* (1938 in *Hdb. d. Altertumswiss.*) を補強増補するのにな。Blegen らのトロイア発掘 (AIA) に発表された限りのもの) と K. Bittel らの小アジア研究をもつてしたといえる。トロイア第一市が金属器時代に属することは問題はなくなつたが、早くもこの第一市からメガロンが認められ、また此時代から少量ながら錫を混

じた青銅があつた。そしてこの錫の産地は内地のエスキュヒル *Ekhschir* であつて、それがエーゲ世界の通商の基本的事実であり、トロイア二市は錫貿易の取引場であつたとし (234) ここにキクラデス、ギリシア本土、中部小アジア、古代東方、中欧のアウンエテイツ文化などの諸要素をあげ、そしてゲッツ等のように小アジアにトロイア・ヨータン文化圏を設定してゐる。しかし此節の最後にマッツは、エーゲ世界の文化的政治的重心はトロイアの没落まではその北東隅にあつた。それからクレタに移つた。トロイアの征服者がミノア人であるとの推測はヒッタイト人であるとの推測と同じく証明されない。しかしこの没落とクレタ海軍力の勃興とは相關する *gegenseitig bedingen* ということとはほとんど疑う余地はない、とのべてゐる (235)。この句こそはマッツにかぎらず、エーゲ文明の研究家にとつての希望の予測であらうし、まだそれに止つてゐる。

さて、ついで初期、中期青銅時代となるとクレタがエーゲ世界の中心的地位を確立する。このうちマッツも中期ミノア第一期から後期ミノア第一期までを二期に分けてゐるが、中期ミノア第三期から後期ミノア第一期までが「ミノア文化の隆盛期」である。後述するように従来の——あるいはクレタ文化研究者があるように——クレタに第一及び第二隆盛期を認めず、また最盛期として後期ミノア第

一期と第二期とが一括されない。後期ミノア第一期を第二期とは別の段階にしたことは、中期青銅器時代と後期青銅器時代という標準からというよりは、むしろギリシア本土との関連——ミケネ勢力の

時期区分に応じた——がより考慮された結果だと、私には思えるのである。このように後期ミノア第一期までをクレタの隆盛期とした結果、前一四〇〇年ではなく、前一五〇〇年をもつてエーゲ世界の大きな分割とすることになったが、この考え方がクレタ的立場でないことは確実である。クレタにとつては後期ミノア第二期の末でありクノッソス没落の年である、前一四〇〇年こそ最大の事件であるからである。そして前一五〇〇年はギリシア本土の立場、ミケネの海上発展が顕著になる時点であり、また同時にこの確認は大体戦後のミケネ陶器研究の成果である^④。しかしそれにしてもマツツのギリシア本土的な立場の強さを認めねばならないが、なお彼はそれ以前クレタの初期ミノアの陶器にもディミニ化 *Diminishing* の末端をここに認めようとしている (226; 228 f.)。

つぎにこのような彼であるから、というよりは既に戦前に充分にエヴァンズやペンドルベリーによつて整理解明されていたからであるが、本書のクレタ文化そのものの記述には、ほとんど新見解も資料もない。ただクノッソスの *West Court* の大円形の穴はこれまで

は破損物の棄場とされていたが、マツツは天水をうけるための水溜であるとし、同じものをファイストスやマリアにも認めていること (345) 注目される。

しかし此時期のギリシア本土については彼は一つの立場をやや強くとつている。すなわち初期と後期のヘラディックの間の約二世紀半は分離するも橋渡しの時期である。初期ヘラディックに微弱ながらも認められた北方からの侵入は中期には強くなり——先住民との混血や並存はなお解けないが——初期の住居地の多くは中期にもそのままに使われ、あるいは破壊後再建されて、中期の新しい住居地は稀である (300 f.)。そして初期と中期ヘラディックの土器には明らかに差異があり、また中期には所謂 *ミニアス土器* と *鈍彩土器* *Mattmalerei* の二種が主流である。しかしながら鈍彩土器をも「ふくめて」中期の土器は初期のものよりより明確に *Tekonic* で北歐的であり、それは *Schurkeramik* の末端と推定される。すなわち土器のこの新しい傾向は中・北欧からきた人であつて、彼等は初期ヘラディックの先馳者について次第に多くなつて、いまやギリシア本土の大部分を占めるにいたつたと (201; 223 f.)。従来、またイギリス派では *ミニアス土器* の作者をもつて、北歐的なインドゲルマン人とするのであるが、マツツはシャッヘルマイルの前出の説を採用

したとも、ドイツ学派の主張を確認しているともいつてもよい。しかしさきのマイエルの説まではさかのぼらないとしても、なおインドゲルマン人の出現に連なる問題についてはマッツらの説は決定的とはいえず、今後にも盛んに論究される問題であろう。

ついでこの時期は本土の南方では初期ミケネ文化(堅穴墓の時代、後期ヘラディック時代)であつて、クレタ文化を受容や模倣しながら両勢力の並存状態は半世紀は充分につづいたが、その状態の動因は通商関係よりもむしろミケネ人のクレタへの武装的侵入により強かつたことは、「もつともな推測」である(367)として、次の時代のミケネの發展を予定している。

- ① デルフフェルトは否定し、議論があつて、ゲッツ (A. Götz, Kleinasien. Hdb. d. Altertums. 24.) は最初の金属時代となしつゝた。さう後述する Blegen, Troy. I. (32, 27) によつてトロイアには新石器時代はなく断然金属時代だと判定され、Child, Dawn of E. C. (37) などこの説を承認した。
- ② メガロン問題については前出。
- ③ Waace-Blegen, *ibid.* にとマルクラのミケネ陶器の研究の結果による。後述七六頁。
- ④ Pendlebury, *Archaeology of Crete*. 219.
- ⑤ Waace-Blegen, *ibid.* 139 ff.
- ⑥ Schachermeyr, *ibid.*

四

後期青銅器時代はミケネの覇権時代である。マッツは前に述べたように前一四〇〇年ではなく前一五〇〇年をもつてエーゲ文明の新たな時期の始りとするから、クレタ文化においては従来クレタの国力と文化の最盛期とされていた後期ミノア二期において、ミケネ的なものへの転換のしるしを求めることになる。ところが彼においては本土にクレタの影響が強大であつた後期ヘラディック二期と、ミケネがクレタを征服し文化上にはそれから独立する後期ヘラディック三期との文化の推移は、馴期的ではなく漸進的でなければならぬ。そこでマッツはこの時期において——クレタの S M II と本土の S H II——のクレタ文化へのミケネ文化の影響、いわばクレタ文化のミケネ化を次のように指摘し強調した。

宮殿様式の陶器は S M II のクノッソスにのみあらわれるが、それはこれまでのクレタ陶器とは異つた装飾と形態——図像的より装飾文的であり、形は同時代の本土のものと似る——とによつて此までも問題にされているが、マッツはそれを本土に依存するとはいわないけれども、この新様式と本土の様式との内的な関連は、両者の間の関係を推定させるとしている。なおこの時期の末にトリグリフ

や細長い半ロセットのような建築的文様の出現をも指摘する(268)。(37)そして要するにこの時期のクレタ文化は内的に疲弊しているのである(37)。(37)このような見方は既にホール Hall などが唱えているところであるけれども、マツツにとつてはSM IIはSM IIIと同じく三頁半の記載にしか値しない。

そして中期と後期のミケネ時代(SH IIとIII)は一括して説く。

もとより彼も前十五世紀における性向と生活観の重大な変化をみとめ(37)。(37)前十五世紀半ごろからミケネ式陶器自身の發達がはじまるとするけれども(39)、彼にとつてはむしろ堅穴墓王朝 Schacht-gräberdynastie と密穴墓王朝 Tholosdynastie の差が——すなわち前十四〇〇年頃ではなく前十五〇〇年頃の差——重視されるから、城塞、金工品、陶器については中期と後期ミケネ時代の別なくまとめられる。

ところで前十四〇〇年のクレタ海上王国の滅亡という政治的大事件が、文化上にはかくも軽視されてよいか。このことは考古学研究のより精密な結果をまつものであるが、ミケネそのものの調査であるウエース(Wace, Mycenaean, 1950)の新書はやはり前十四〇〇年をもつてミケネの重要な劃期としている(殊に同書二二頁以下)。またクレタについてもLM IとIIをもつて最盛時とするペンドルベリ

I. Pendulbury (The Archaeology of Crete, 1939) の立場は未だ変えがたいと思われる⁽³⁾。かくて私にはSM IIの文化と同時代の本土の文化との関係、この時期のクレタの海上勢力と文化の停滞の程度——後述のスタッピングやカンターの說のように停滞そのもののは否定したいとしても——は今後に開明されるべき興味あるものとして残しておきたい。

なおマツツは後期ミケネ(SM III)の陶器はさらにA、B、Cに三小分して説くが、これは戦時と戦後の新研究をとりいれたものである。ミケネ陶器(文化)は次の幾何学様式にくらべては一樣であつて、ミケネ文化の共通性 *koine* が唱えられていたが、最近ではその地方性が次第に明かにされてきたからである。

以上マツツの書を中心としてエーゲ文明の体系についての変化をのべてきた。マツツの意図は前述したようにこのような包括的な面以外にあることは勿論であるけれども、それを手掛りとしてエーゲ文明研究の諸方向にふれたのである。そしてこの書はいくつかの問題をふくむけれども、最近までの成果を極めて広くとりいれ、かつ体系づけた基本的な書として今後の研究の根幹であらう。

① Snider K. K. 19, 36, 123 f.; Wace-Blegen, Klio XXII, 138 f. は本土に起源を唱く。また新しくは Kantor, The Aegean

and the Orient in the second Millennium B. C. 54. なお次節参照。

② Italy, The Civilization of Greece in B. A. の第四章初期青銅器時代ではミケネにより多くの頁をつかいLM IIはクレタ文化の頂点であるけれども、ただ洗練の時代であつて、創造は全く建築は改悪されている(一七九頁など)。

③ 彼は初期、中期、後期ミアノ時代を通じて各々を三分して別々に記述するにかかわらず、LM IとIIのみは一括している。このことは両期は分ちがたいとみるからである。

五

以上マッツによつてエーゲ文明研究の近況の大綱をのべたが、叙述の混乱をさけるために、当然ふれるべくしてふれなかつた労作や附言しておきたい力作を残した。それでここにそれらを簡単に紹介して置きたい。K. Schefold, Orient, Hellas und Rom in der archaischen Forschung seit 1939. 1949(Wissenschaftliche Forschungsschriften, Archäologie). の Grundlagen の部はクレタ、ミケネ、クレタとオリエンツ、北方や地中海的要素についての主要な論文著作を整理してエーゲ文明研究の概観をつかむことができる。しかしなお若干の主要著について新刊紹介的な私見と解説をこころみようとおも

う。

まずエーゲ文明の最も重要な遺蹟であるトロイアとミケネについてほとんど最後の調査研究が公にされたことから始めるべきであらう。トロイアは一九三二年から三八年にわたつてシンシナティ大学の C. W. Blegen らによつて徹底的に発掘調査されて、一九三七年から三十九年の American Journal of Archaeology に報告されていたが、いまそれを整理した大著がうまれた。それは全四巻の予定とかがうが、I. The First and Second Settlements. 1950. II. The Third, Fourth and Fifth Settlements. 1951. III. The Sixth Settlement. 1953. まづ出ている。いづれも本文と図版の二冊からなる。私はまだ第二巻までをわづかにみたにすぎないので、詳細は樋口氏と関西学院史学との紹介にゆづるが、このたびの発掘はシュリーマン、デルプフェルトがトロイア城塞内に掘り残した部分(“pinacle” “island”)、城壁の外側や丘の麓を根本的に発掘し、さらに丘の附近に多くの試掘溝を試み、また近くの丘や墳墓にも鋤をいれたのであつて、多くの新発見がなされた。その発掘調査方法は全く科学的であつて、機械的な精密さは、たとえば第一市にさらに三、第二市はさらに七に細分し、土器に実に百余種に分類されている。①

そして幾多の新事実や判定がだされたが、その主なものあげる

と、第一市が非常によく究明されて、第二市と同数の頁をしめ、それを銅器をもふくむ青銅器時代と断定し (I. 22; 37)、またすでに「顔盤が興味をひいている。つぎに第三市から五市までは従来は「貧弱な村落」として軽視されていたが、ブレーゲン等はそこに第二市文化の継続を強調し (I. 208)、第二巻をすべてこの時期にあてた。そしてホメロスのトロイアは第六市でなく第七市 A なることを明かにした。^④これらの重要な結論は今日では承認されているが、なおつねにトロイアと外部との関係に留意し、また新たなトロイアの年代を提出した。しかしこの編年は従来よりも古くみるものであつて議論の余地が多い。^⑤ともあれ本書こそエヴァンスの「ミノスの宮殿」に匹敵するエーゲ文明研究の金字塔である。

A. P. B. Wace, *Mycenaean Archaeological History and Guide* 1939. は左程大冊ではないが、ミケネについてはシュリーマン、ツインタスの調査著書につづく第三の道標である。ウェイスはさきにミケネを精査したが (ABSA. XXV. 1926)、それらの結果からの総括である。本書については私は他に紹介したが、ミケネのアクロポリスについては、その変遷や配置や文化について最も確実に示した。しかし城外——トロスの精密な調査は本書の特色であるが、それ以外——について、また土器はほとんどふれられていない。なお私は

エーゲ文明研究の近況について (村田)

未見であるが、アジネやデンドラの発掘者によつて A. W. Person, *New Tombs at Dendra near Medea* 1942. は重要なものらしい。クレタについてはアチネのフランクス考古学会の *Étude Crétoise* の続刊があるはずであるが、F. Matz, *Forschungen auf Kreta* 1942. 1951. はドイツ軍がこの島を占領中におこなつた発掘調査研究の編集である。^⑥

つぎに遺蹟をはなれた方面の研究は、小論の冒頭にのべたように戦時戦後で著しい成果をあげる方面である。そのうちでもミケネ陶器の着実精密な研究は最もめざましく、エーゲ文明史の一部を書きかえさすほどになつたと、私は思う。前にものべた Wace-Blegen の論文 (Klio. XXXIV) がミケネ陶器の研究からして LH II にはレヴァント・ギリシアの交易があつたと説いたが、それが結果したのである。これまではミケネ文化の数百年間はいわゆる *koine* としてただ全地域と全時期を通じてただ一様であつたと理解されてきたが、いまそのミケネ文明に時間的な差と地域的な差が明かにされ、そのことからミケネ、クレタのエーゲ世界における文化や勢力圏の消長が説明されてきたのである。スウェーデンの A. Furmark の二著 *The Mycenaean Pottery* 1942. *The Chronology of mycenaean Pottery* 1942. はミケネ陶器を二期に分類し、各々の時期の年代を決定し、

ここに新しいミケネ陶器研究の基礎をつくった。^⑧

このフルマルクの研究をすすめてミケネ陶器の地域差を明かにしたのが、F. H. Stubbings, *Mycenaean Pottery from the Levant*, 1951. である。彼はロードス、キプロス、シリア、パレスティナ、エジプト各地方の諸地点から発見されているミケネ陶器を一々に考究して、それらの地方性と年代とを定め、さらに考古学研究の究極の目標は歴史との校合であるとする彼は (105)、ウェイス・ブレーゲン⁽¹⁰⁶⁾の提唱を精確に具体的にし、数歩すすめて、上述の諸地方の各時代におけるミケネとの交渉を明確にした。彼によると、ミケネとエジプトとの通商は早くも LH I からあり、クレタとエジプトとの通商よりも強力になつてゐる。またこれらレヴァントのミケネ陶器はギリシア本土製よりもロードス、ついでキプロスの製品であるという。そして前一二三〇年ごろ (ミケネ式 III C) からミケネ文化の一様性が分離しはじめることがみられた。ここにさきにマツツが前一五〇〇年をもつてエーゲ文明の前期としたことと相通じる。

一体、戦時戦後のエーゲ文明研究の重要な特色はマツツにその例がみられるように、LH 以来すでにミケネ勢力がクレタを圧してゐることに解明であると、私はみている。スタッピンガスもそれであるが、H. J. Kantor, *The Aegean and the Orient in the Second*

Millennium B. C., 1917. (AIA. 51, 1917. 所収と同一) もこの点に寄与している。この書も陶器を研究の対象としてゐるが、より広く文様財——渦文とその系統や動植物など——などの研究によつて文化や勢力の交渉を明かにしてゐる。スタッピンガスは LH I (前一五五〇年ごろ) 以来クレタ商権の後退をみとめたが、カンターはより早く MM II の末以来はクレタは東方で重要な通商勢力ではなく、ミケネ・ギリシアの商人や航海者が、東西を結びつけ (106)、LH I では全く主力である。そして前二千年期 (MM ごろにはじまる) にはギリシア本土に対するエジプトの影響よりも、エジプトに対するミケネ文化の影響が強くとめられると。このようにミケネ陶器の研究はこれまでのエーゲ世界の姿をかえようとしている。^⑨

この際小アジアとエーゲ文明との関係は当然とりあげられねはならないが、この地域とエーゲ文明との明確な関係はまだ充分に考究されていない。小アジア研究はまだ依然と分散的である。しかしこの小アジアについて二つのすぐれた総括書が著された。N. Bittel, *Gründzüge der Vor- und Frühgeschichte Kleinasiens*, 1945. 2. erweit. Auf. 1950. と *Alt-Kreta* の著者 H. Th. Bossert の二著である。ボッセルトの *Altanatonien* (1942) と *Altayrien* (1951) とは「アルト・クレタ」と全く同じ性格のまた同じく最高のスタンダードな図版集

である。「アルトアナトリエン」は戦時ベルリンで出版されたが、まだどうしても入手しえない。後書は「原始からギリシアローマ文化までのキプロス、シリア、メレスタイナ、トランスヨルダン、アラビアの美術と工芸」と副題にあり、図版実に一四一七をおさめ、地図と編集は正しい解説とともに本書の価値を示している。

所収の頁数はすでにつきたから以下簡単に全く紹介的にふれておくことを許してはこう。H. I. Lorimer, *Homer and the Monuments* 1950. は火葬、鉄、文字、武器、衣服、家などについて表題の点からの研究であるが、それは長年をかけた労作である。エーゲ文明とギリシア文明との結合期の研究は今後の課題であらうが、M. Nilsson, *Homer and the Mycenae* 1933. にべらべて多分に考古学的であるけれども、第一章「Prehistoric Greece」はよく総括されている。クレタ文字は解説の鍵が見付かったように報ぜられながら、まだ解きえないが、A. Evans, *Scripta Minora* 2, *Palace archives of Knossos* 1952. が第一巻の出版後四十余年にして出版されたことは、エヴナスの不屈の努力にうたれるのである。

宗教については注目すべき著書が書かれた。M. Nilsson は *Mytho-Mycaean Religion* を改訂したが、旧著との比較を暇のない私は期待してゐる。彼はなお大著 *Geschichte der Griechischen Religion* である。

エーゲ文明研究の近況について (村田)

Gron I (Hab. u. Al.) 1951. の第二部の「前ギリシア時代」の百餘頁をクレタ、ミケネ、ホメロスの宗教にあてている。また Ch. Picard, *Les Religions préhelléniques (Crète et Mycènes)* 1948. A. W. Purson, *The Religion of Greece in Prehistoric Times*, 1942. ⑧ エーゲ文明の信仰の研究が、一つの研究領域にまで成長したことを示しているが、さらにギリシアの宗教との関係に多くのことを教えるべき。最後に G. Thomson, *Studies in Ancient Greek Society, I. Prehistoric Aegean*, 1949. は村川堅太郎氏と奥茂一氏の紹介があり、⑨ 学界に多くの論議をおこしている。ただ私はエーゲ社会とオリエント社会との共通性について——トムソンの立場とははなれるけれども——興味をもつこのみを加えておきたい。

エーゲ文明研究の近況をのべるにあつてその編年の研究が無視しえないことを、この論稿の当初にあげたところである。それはマリヤ・ホルサバードからの新資料の発見によるオリエントの編年の変動とエーゲ文明そのものの研究が進んできた結果である。この編年について幾多の論稿が提出されたが、それらはエーゲ世界における各文明の編年の平衡化と古代東方世界の編年との結合への努力であるといえよう。いまはそれらの編年を考察するいとまがないが、全体的なものをとって S. Weinberg, *Aegean Chronology: Neolithic*

Period and Early Bronze Age (AJA. 51. 1947. 16). 4000年頃の
 “Die Ägäis” の題名 (180). Zur ägäischen Chronologie der frü-
 hen Bronzezeit (Historia I. 2). などについて、ミタネ文化に
 ついて前述したホルヘマンの著書に J. Berard, Recherches sur la
 Chronologie de l'époque Mycénienne. 1950. などがある。ホルヘマン
 の著書はホルヘマンの著書に J. Berard, Notes sur la Stratigraphie et
 la Chronologie de Troie au Bronze Récent (Historia I. 3). C. Scha-
 effer, Stratigraphie Comparé et Chronologie de l'Asie Occidentale
 1948. (Chap. VI) などがある。その目にはついている。しかしエーゲ文明
 の編年表は、動揺している決定は将来にわたるべきである。

- ① J. Wiesner, Vor- und Frühzeit der Mittelmeerländer. I. Das
 östliche Mittelmeer (Sam. Göschen). 4冊の小冊子であるが、細
 羅的な具体的な記述である。
- ② 古代学、二巻二号、関西学院史学二号。
- ③ 多くの遺物は当然として、たまたま、Sanctuary, Pillar Ho-
 use, Theater, などが、なお幾多の家や部屋が発見された。
- ④ 土器は第一市から五市を通じて A 型は四六、B 型は二四、C
 型は三九、D 型は三四に分類して表示する。しかしこの細分
 表からわれわれにもいくつかの興味ある推論が試みられる。
- ⑤ I. 3200-2600 II. 2600-2300 III. 2300-2200 IV. 2200-2050
 V. 2050-1900 VI. 1900-1300 VII A. 1300-1200 VII B.
 1200-900 VIII A. 900-550 VIII B. 550-250 IX. 250-400 A.
 I. 400-300 B. 300-250 C. 250-200 D. 200-150 E. 150-100 F. 100-700 G.
 700-500 H. 500-200 I. 200-100 J. 100-50 K. 50-20 L. 20-10 M. 10-50 N. 5-10 O. 1-5 P. 1-5 Q. 1-5 R. 1-5 S. 1-5 T. 1-5 U. 1-5 V. 1-5 W. 1-5 X. 1-5 Y. 1-5 Z. 1-5

- 700 キリシア時代 R. ロード時代 ホーマン年代は、I.
 2800-2300 II. 2300-2100 III-Y. 2100-1800 VI. 1800-1350
 VII a. 1350-1200 VII b. VII. 1200-100.
 西洋古典学研究、一巻、一四四頁以下。
- ⑦ 著書のみを取りあげて雑誌には殆んどふれえないから、発掘
 や発見についてはふれていないことを断わっておく。
- ⑧ この著書を見つけないけれども、彼の分類は次のようであ
 る。My. I. (c. 1550-1500) II A. (1500-1450) II B. (1450-
 1425) III A. 1 (1425-1400) III A. 2 (1400-1375) III A. 3
 (1375-1300) B. (1300-1250) C. 1 a (1250-1200) C. 1 b
 (1200-1125) C. 1 c (1125-1075) C. 2 (1075-1025)

- ⑨ エーゲ世界と東方との関係についてはなお、地中海東岸地方
 の研究からいくつかの裏付けや新事実が、あるべきであるが、
 それにはふれる時間も力もなかった。

- ⑩ ドイツの小アジア研究の第一人者のこの著書は旧石器時代か
 らペルシアにまでわたる小アジア文化の大綱である。A.
 Götz, Kleinasien (Hdb. Alt. 1933). をおきながら、また甚だ総
 論的である。

- ⑪ 本書は未見。
- ⑫ 思想、三二三号 (一九五一、五)、西洋古典学研究 I。
 前出七〇頁の註⑤参照。

(文部省科学研究の報告の一部)
 【書誌】 松田後、Wace, History of Greece in the third and
 second Millennium B. C. (Historia 1953. I.) の訳題に「それ
 の比較参考を希望して」等。